
一部50円です

社会の縮図



「わたしが村に嫁いできてから70年あまりになるが、家々の財産はほとんど変化していない」と母は、自信げに言う。私は「そんなことはないやろ」と言いながらも暗澹たる気分になったものだ。

村の生活の基盤は田畑と山林であった。コメをつくり、木をそだてながら生きていたから、土地の多寡が生活を左右する。人々の土地への執着はつよい。狭い山里の耕地であるからなおさらであった。

となりのコマキさん宅は、4代前に、村のさらに奥にあった村から、この村に引っ越しをしてきたために村の端にある我が家の隣に家を見て、村八分にならぬように我が家と本家・分家の関係を結んでいた。そんな事情なので所有している田や山は少なかった。

かたや、もう一方の隣であるみっちゃん宅は土地持ちであった。田もいい場所にあり、山林も多くあった。この家は代々この地で生きてきたからだろう。我が家は、8代目までは寺の過去帳で確認できる。それ以前は分からないが、家の場所、田んぼや山などから見て、みっちゃん宅より後にこの村に来たと思える。

一番の金持ちは、村の中央部の平地に屋敷があり、田や山もいい場所にあった。家の建っている場所を見れば、その家が建てられた当時の事情をおよそ推察できる。新参者が村の真ん中に居座ることなど出来るはずはないからである。

働き口もなく、日々野良仕事に明け暮れる村の生活では、貧乏人が金持ちになることは難しい。母の言葉から、となり二軒を考える「この村に早く来たか、遅く来たか」で決まるんだと、つまり陣取り合戦なのだ。人の優劣ではないんだと。単純ではあるが、どこか割り切れなさが子供心に残ったのだが、これがこの社会の姿なのだと思います。(嘉)

死をめぐるあれやこれ(5)

石川 吾郎

「パノプチコン」

先日新聞の一面広告で、信州の先進的な巨大総合病院の全景の写真がでていた。驚いたことに、それはパノプチコンの構造をしていた。◆このパノプチコンというのは、功利主義の父親といわれ「最大多数の最大幸福」の言葉で知られる哲学者J・ベンサムが考案したという構造で、数棟の建物が放射状に配置されてその中心部にコントロール機能が置かれたような建物である。徹底した功利主義者のベンサムはこれを、囚人を効率よく管理できる監獄の建物として考え出した(教育的でもあると信じたい)。現代でも日本を含め世界中の監獄で実際にこの構造を採用しているものは多いようだ。◆なるほどちょっと考えればこの構造、人を管理する目的には省力化できて非常に合理的・効率的にちがいない。この総合病院の建物では病棟をこのパノプチコンに割り当てているのだろう。管理するという視点では病人も囚人もあまり変わりはない。◆しかし生と死のせめぎ合う場である病院と、犯罪者を収容する監獄との相同性には単なるメタファー以上のものを感じる。ホロコーストの整然たる合理性・効率性を連想してしまうのは考えすぎだろうか。◆さらには今の日本という社会、人の(生と)死が徹底的に管理をされているような気がしてしまうのだ。我々は目に見えない多くのパノプチコンにとりまかれていないと、はたしていえるのだろうか。ふとそう考えてしまったことであった。

里の柿から

晩秋の里を彩る柿の実だが、最近では猿や鹿がお先にとつて食べてしまうという。

毎年行われる「宮の講」。これには各戸にとつては、必ず用意しておくべき「ほうだい柿」「酔いざましに柿」

十二月一日、公会堂で村人たちが集まって、戸主、長男、餅つき、女性はエプロンにモンペばきで煮しめ作り、大変な一日なんだけれど、みんな楽しそう。男も女も、子供も、当番の人から、

次年度の当番の人に氏神様の御札と共に引き継ぎ式があり、「よろしく」。あいさつが終れば、大きな宴会が始まる。白い餅二個、大一個、汁物、煮しめ、一戸配分である。お膳が並べば、餅を食べる人、煮しめにありつく人、早速持ち帰る準備する人、毎年の事だから、

子供たちも餅だけ抱えて「早く帰れ、帰って食べ」あとは大人の世界。酒宴が始まるから、子供に見せたくない父親の姿を「早よう、早よう」とせきたてる。

子供も心に、又、あと何かが起こってるぞ。喧嘩だ。何を言ってるのかわからないけれど、なだめている人、それぞれの立場で、ワイワイ、すっかり変わってしまったのだ。酔っている人に、用意しておいた柿を食べさせるんだ。「ブツブツ、何んでこんなも

ん食べるんだ」相手は馴れたもの。

毎年のことだから、手荒く、たまには「バシツ」いさぎよい音。ほつぺたを、たたかれて口をあけている姿をのぞき見するのも楽しい。

翌日は、昨日は何事もなかったような顔をして後片付けに参加している。その顔はニコニコ。これでこそ、生きていけるんだわ。

「昨日はごくろうさん。ヤレヤレですなア」次は来年の氏神さんの行事をしてくれる人。「当番制」に引き継がれてゆく。

古い昔のしきたりが、今でも親から、子供から孫へ、実家へ帰って弟夫婦から聞き、うれしいことであり、又ひとり郷愁の念にかられる現在である。

くべる

最近こんな言葉を聞いたこともない。

時代の変化と共に、遠くへ過ぎ去ってしまった。昔、蒸気機関車の運転手がシャベルでしきりに石炭を釜の中に放り込む。

田舎のバスも同じこと、雪の中でその仕事ですむまで待たされ、やっと発車オーライ。テレビで洋七さんのがばいばあちゃん

が放映された。大きなかまどの側で洋七さんが、薪をくべている姿、消えたら火ふき竹で火をおこす。ふつくと煮えたご飯が映る。時代劇を見ると、貧乏長屋の場面が出てくる。破れ障子、せんべいブトン。そして食べているのが、「いもがゆ」「麦

ごはん」。「貧乏人は麦を食え」、時の大蔵大臣が言つて、国民の怒りを買つたりした。

そうしてやつと、いつもの混じつていない米だけのご飯の時代がやって来た。

そういう生活にありついたと思つたら、「十穀ごはん、十八穀ごはん」なんてこと。栄養を考えてのことなのか。私にはわからない。私は口にしたことはない

が、みなさん口を揃えて「まずくない」「白飯よりも明らかに味が濃くて口の中が大忙しいよ」という。

この年になって今更、食べてみたいと思わない。やつぱり、薪をくべてご飯をたたくこと位、もう一度昔にかえつてみたい。そして孫達が、口にほおばり、ホツペたにご飯粒をつけて、おにぎりを食べる姿が見たい。



思い出

とかく長男は、のんびりした性格のように思われ「総領の甚六」などといわれたもの。

戦中、戦後、何もかも不自由な時代。田圃の中に立つて備中を使い、鍬を振りあげて「お前は長男だから、といわれ百

姓をしながら、しんどい事ばかり。楽しいと思つた事がない」

亡き主人のくり言を思い出す。

学校の春休み、夏休みに天神の祭りにも参つたことがない。一度もつれていってもらつた事がない。さびしかった、と。弟妹の多いのと、農作業で疲れ切つた親の姿。瓦屋根葺(やねふき)だった父は、

雨が降れば仕事なし。酒にひたる。そういった環境に育つた主人は、何とか助けて働かねばと思つたそう。

どんな仕事にも黙々と働く姿を見て「生活が大変だろう。この会社に話をしておくから、どうだ？」と親類の人から声をかけられ、一人の会社員として入社。誠実、責任感の強い人柄が周囲の信頼を集め定年までつとめ、後、十年「あそんでいてはバチが当たる」再就職。頑張りましたネ。

「昔苦労してもみんなが元気で生きることが、わしのよろこびだ」最後に別れの一言「いろいろ世話をかけたなア」とあの世へ。主人のコトバをかみしめ、いまだ元気で生きる幸せを口にしていきます。

俳句

土田 裕

洋館の窓を囲みて蔦紅葉
群青の空の下なる寒さかな
鴨の群れ一羽動けば皆動く
地に還る色には遠き落葉かな
木枯しや楠の大樹の仁王立ち

目次	ページ
巻頭エッセイ	1
巻頭コラム	1
女89年の軌跡	1
俳句	2
闘病記21	3
おっちょこちょいほけ21	4
こころの診察室14	5
世界一周旅行記7	6
大人の今昔物語6	8
哲学屋のつづやき6	10
記録と表現の間	11
B級サラリーマンの 渡世譚19	12
素老人・よもだ帳9	13
編集後記	14

ページ

ステーキ丼を食べたいからでもあった。昼食の前後や夕食前であつても食べてしまふのである。

ステロイド剤の副作用の為か食欲だけは旺盛で、いつも頭の中は食べることだけであつた。しかし、三度の病院食をたいた上にはステーキ丼や差し入れの果物を食うのだから、体重はすぐに増える。体重を少しはごまかせても血液検査結果はなんとも出来ない。ステロイドの影響で糖尿病を併発しやすくなっているからなおさらである。これ以上の肥満は許されないのである。

よっちゃん、そんなことを考えるより、餓鬼のように食うことばかりを考えていた。見舞い客にご馳走するという口実を無理やり作つては、自分を納得させていたのだ。

毎朝、看護師が血圧、ヘモグロビンを測りに来るが、体重は自己申告である。

毎朝、よっちゃんは、ナスステーキの横にある体重計にのつては溜息をつく。ドンドン増えている。あまり増えると担当医は食事制限を言うに決まっている。糖尿病患者のように、日に七回も血糖値の検査を受け、糖尿病患者のような食事に変更でもなつたら大変だ。食べた気が持ちと食べてはいけない矛盾した状況におかれたよっちゃんは如何に体重を増やさなにか考えた。考えたすえに運動をするしかない。食べたければ歩くのが一番だと思つた。よちよち歩きであっても身体を動かし汗をかくのだ。

そんな訳で、聖書を読むか公園を歩く

という病院生活を送ることになった。毎日幾度も体重計にのつては歩く時間を調整した。どうしても減らないときは、ステーキ丼を諦めて、蕎麦にするとか間食をしないなど対策を考えた。有難い事に病院食だけだと体重は減る。若い隣のベッドの兄ちゃんも、いつも看護師にぼやいていた「もつと大盛りの飯が食いたい。少なすぎる……」私も、同じような事を思つていたが病院の決まりなら仕方がない。まわりの糖尿病患者たちに配膳される少量のご飯を思えば、まだ幸せだ。ほんとうに彼らはかわいそうだ。バナナも半分、飯も半分。看護師の目を盗んで間食しようものなら血液検査ですぐばれてしまうから、おとなしく耐えねばならない。四

〇日間辛抱すれば彼らは無罪放免となつて退院していく。そして数年後、節制が出来なかつた人は、また入院してくるのである。

しかし、彼らの中でも自らの不摂生で糖尿病になつた人とは違い、遺伝性や突然の自己免疫障害からなつた人もいるので一概には言えない。暴飲になつた人などは、大概これまでの無茶苦茶な生活をしきりに反省していた。この人たちから話を聞くと、よっちゃん、自分の酒飲みの程度などたかがしれたものだと思つた。

よっちゃんですら呆れるようなすごい酒飲みが世のなかにはいるのだ。隣に入院してきた運転手などは、「昔は、飲酒運転など当たり前で、毎日、あるメーカーの倉庫に行く」と守衛のおじさんが、事務

所に冷たいものが冷やしてあるから、と言つてくれた。仕事が終つてからも、また酒を飲み二日酔いで運転するような事を永くやつていたから、こんなことになつたんや。そら仕方がないわな。」

東京から来ていた爺さんもしきりに反省していた。それに引き換え遺伝性の人には、母親を非難していた。「母は、自分が糖尿病なら子供も糖尿病にかかりやすいのだから、食事に注意してくれたらよかつたのに……」病棟には人生の嘆き節が飛び交つていた。

よっちゃんは、誰を恨む訳でもなく運と思つてあきらめていたのだが、食うことだけは諦めきれなかつたのである。

しかし、何が幸いするかわからない。とにかく食いたいたために歩くことを毎日の日課にしたおかげで、身体の筋肉が何とか歩ける程度に維持できた。またステーキ丼の肉も筋肉の維持に少しは役に立っていたのかもしれない。夜眠れなくても、身体が少々痛くても、目が充血していても、ひと目にさらしたくないようなぶざまな姿であつても、毎日歩いてきた。この習慣が後になつていきつてくるとは、その時には考えもしなかつたのであるが、歩くという事と早寝早起きは、人が健康に生きていくための基本であるからだ。

連載小説◆負けるな！よっちゃん番外編

《闘病記》21

楚店主

迷走の世界

誰かが見舞いに来てくれると、看護師に少しの間留守になる旨を伝えて、十四階にあるレストランへ必ず行く。いつものステーキ丼を、見舞い客にご馳走する為である。もちろん、よっちゃんも同じ

あたしや、文句つたれ婆さん…の巻

「いじわるばあさん」といえば、ご存じ「サザエさん」の長谷川町子の描いた漫画の主人公。あのばあさんの名前が「伊知割 石(いじわる いし)」だって皆さん、知ってました? わたしは知りませんでした。そんなことはどうでもいいんですけど、最近、「意地悪」なことが言いたくてたまらない。アイツにもコイツにも文句を言ってやりたい。これ、老化と関係があるのだろうか?

たとえば、この前、近鉄電車の車内で、高校生の男の子が一人、乗ってくるなりドアにもたれてあぐらをかいて座った。いわゆる「地べた座り」。ドアって、連結部のドアではなくて、駅に着くたびに開くドアの方である。もちろん、その男の子は自分が乗って来たドアの反対側、その駅では閉まっている方のドアにもたれて座り込んだのだが、次の駅では開くかもしれないドアである。私は小心にもどきりとした。「危ないよ、うっかり開いたら背中から線路に落ちるよ。その若さで死ぬよ」と思った。見れば、ジャニーズにスカウトされてもおかしくない、可愛い顔をしている。だけど、傍若無人。スマホだか携帯電話だかを取り出して見ている。

考えたら、日本の電車は急にドアが開いて人が落ちるなんて事故はめったなことでは起こさない。だから、「開くドア」にもたれてあぐらをかいていようが、お茶をたてて飲んでいようが、放っておけばいいのである。だけど、つい、ちらちら見てしまう。「普通、そこに座るか?」。何人かで群れているときなら、わかる。いきがって座る、とでもいうか。でも、

彼は一人である。別に、ドアにもたれて座り込まなくてもいいんじゃないか。足腰、健康そうだし。「あんたみたいな子が、そのきれいな顔に騙されて寄ってきた女の子を不幸にするんやろうな」と私は思った。「落ちへんかったらエエんやろ」じゃないんだよ。自分がしたいことをする、周囲なんかおかまいなし。その生き方、あたしや、ムカツク。そして思った。「落ちない程度にドアを開いて、ヒヤツとさせたれ、近鉄電車!」。確実に「いじわるばあさん」である。

「あべのハルカス」にも文句を言いたい。六〇階の展望台に上がるには下でチケットを買うのだが、何故だかその売り場が展望台と直結してないのである。チケットを手に入れたん外に出て展望台の下の入り口まで歩く。もし、友だちと行っていたら、その距離など気にならなかったかもしれないのだが、八十八歳の母と一緒にいたから、「何だ、コレ?」と思った。そういうところがやたらに目についた。

チケット売り場に並ぼうとしたら、母が「トイレに行っておきたい」と言う。そのトイレは、売り場周辺にはなくて、近鉄百貨店の中に入って、売り場を通り抜けて、また通路に出て、エスカレーターの部分の微妙に迂回してたどりつくというムカツク設計。

何がどう悪い、というのではないのだが、「なんか不親切だよな、年寄りに優しくしないな」と思った。そういう不信感があるからか、六〇階の展望台も「まあ、こんなもんやろな」の世界。三六〇度、大阪を見渡すことができるのは本当だし、それなりに圧巻なのだが、「一回見たら、もういいや。チケット代一五〇〇円だしな」と感じ。リピーターが多いというデイズニールランドとは違う。ひとこと言くと、不親切。愛がない。表示はあるのだが、わかりづらい。こういうのは、さりげない方がお洒落だと思っっているんだろうけど、「お洒落だけど、しっかりわかる、っていうように工夫せな、あかんわな」と言いたい。

もちろん、わかっている。ステキなカレと一緒に、「おい、すごいよ! あつちを見てみる、大阪湾だ!」「あら、ホント!」てな感じだったら、一五〇〇円でも百回ぐらい行きたいと思うんだろうな。ってことは。

さて、一番、意地悪を言いたいヤツ、もう皆さん忘れかけていると思うけど中

国の豚まん、じゃなかった国家主席。安倍総理がにこやかに挨拶しているのに、ニコリともせず「ため、何様だよ!」と言いたくなる横柄な態度。わたしは自民党も安倍総理も嫌いだが、習近平のあの態度は超ムカツイタ。十三億人の国民がいればエライとでもいうのか? 二回ほど中国旅行に行つたけど、党本部が中国の一般の人たちの生活を圧迫し、嫌われていると肌で感じた。茶畑で「ここで採れた最高級の茶葉は共産党本部に献上するんだ。いいものは、みんな彼らが持つていくんだヨ」と小声で言つてたけど、それって共産党のやることなのか。中国人も中国人である。もつと声を大にして言わんかい! である。一三〇〇〇〇〇〇〇〇人もいてなんだよ、みんな弱腰すぎる。香港の学生諸君、頑張れ! ついでに共産党本部を解体したれ! と思うけど、その前に醜近平に意地悪を言うておかねば。言つとくけど、世界に恥をさらしたのはアンタだからね。みんなが何て言うてるか、知ってる? 「外交の場で、なんと大人げない!」ホスト国としての礼儀にかける行為「自ら三流国家であると示したのと同じ」。よっぽど困っていることがあるのだろうか。でなきや、他人にああいう態度は取れない。死んだ後まであの映像は流れる。ある意味、お気の毒さま…。(A〇)

「居心地よさ」

人というものは、つくづく不思議だと思えます。ある人が今後どのような行動をとるのかを正しく予測できないものか、私はただ願ったことでしょうか。でもそれは現在の医学・科学ではとても無理なことであることもよくわかっています。しかしその手がかりといったものだけでもないものかと思えば考えられます。

精神科医としての私の経験から考えると、「居心地よさ」ということが、人の考えや行動を考える上でポイントになるような気がしています。人は、何らかの意味で「居心地よさ」を求め、「居心地の悪さ」をさげようとすると考えられます。

「居心地」のよしあしの内容については人の主観によって違うので、簡単には論じられません。同じ状況でも人によって居心地よく感じる場合と、そうでない場合があります。しかし、この「居心地」ということを表現すると次のようになるでしょう。

おわんの底にボールがある状態を考えます(図①)。ために、底から少しずれた所、つまり少し高い場所に移して、そこで放してみると、コロコロところがって、あちこちと揺れ、やがていちばん底に落ち着くこととなります。この時、いちばん底がボールにとって最も安定している、もしボールに「こころ」があるとしたら、「居心地がいい」と感じるようになるでしょう。

私はこれを「居心地ポテンシャル」と名付けました。図①のように、底が一つの場合であれば、その底が文句なくいち

ばん居心地のいい場所ということになります。

けれども、現実にはこのような単純なケースばかりではありません。何か葛藤がある場合には、おわんの底が二つ以上あることが多いものです。図②を見てください。図②がこの場合の居心地ポテンシャルを表すものとします。ここには二つの底、つまり二つの安定点があります。いちばん低い居心地の最もよい真の安定点Aと、もう一つの点B。これはAより高い所にあり、居心地はよくないけれども、その点のごく周辺の領域だけを見ると、居心地のよい、安定点となっています。つまり偽りの安定点ということになります。Bは、たしかに安定点ではあるわけですが、大局的に考えると、やはりA点

がもつとも居心地がいいことは明らかで、Bの状態からAに移るのがよいということになります。このように二つの安定点が分離しているようなケースはわれわれもよく経験します。

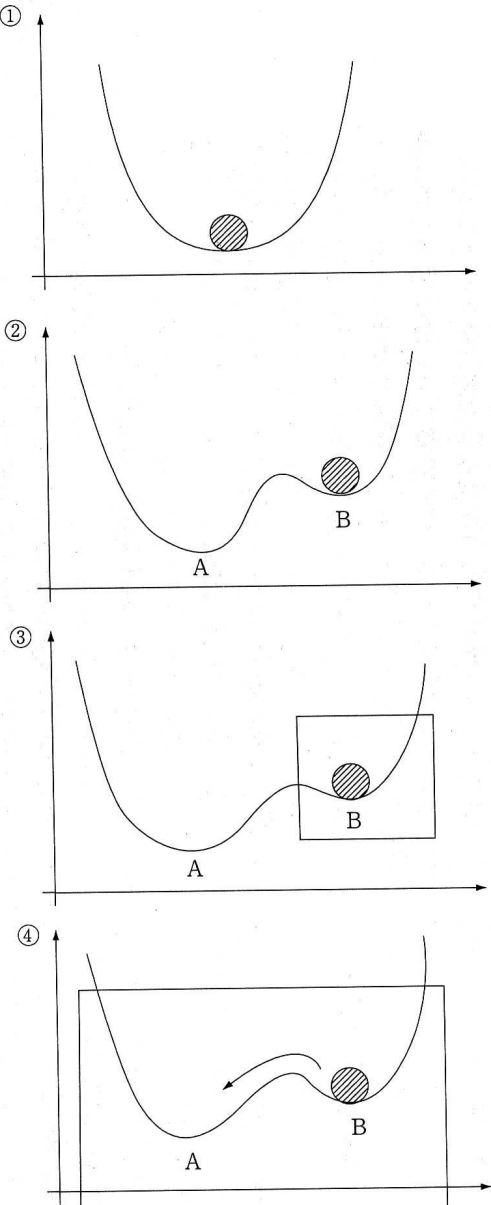
のようなケースが多いものです。何かに迷っているという場合、点AとBがほとんど同じ高さにあるとき、どちらが本音なのか自分でもわからないという状態になってしまふこともあります。

もしBの状態にある人がいるとすると、その人にとっての視野が図③に示した枠のようになっているとすると、ほんとうの安定点には気づかないこととなります。そこにとどまっている時、外から揺らしてほんとうの安定点Aへ移そうとしても、この人は、安定点はBのみだと信じているので、抵抗して移ろうとはしないでしょう。そこは視野の外にあつて、本人にはわからず、揺すぶられても不安な状態に陥ってしまうこととなります。

本人の視野が拡大して、図④のようにすべてが見渡せるようになって自分からこちらの方がいいんだなと感じられるとおのずから自然にほんとうの安定点にくくこととなります。このときには、むろんその間にある障壁を越えるだけの努力は必要になるのですが、これはそれほどたいへんだと言うわけではないでしょう。ここで注目していただきたいのは、居心地ポテンシャルの現実のあり方とその人がとらえている内容とは必ずしも同じではなく、その間にズレがあるということです。

先ほどの図の例で言えば、何かの理由で、視野が狭く限定されていて、偽りの安定点Bの周辺だけに限定されているとすると、その人の認識では、B点がいちばん居心地のいい所だと信じてうたがわ

図表1



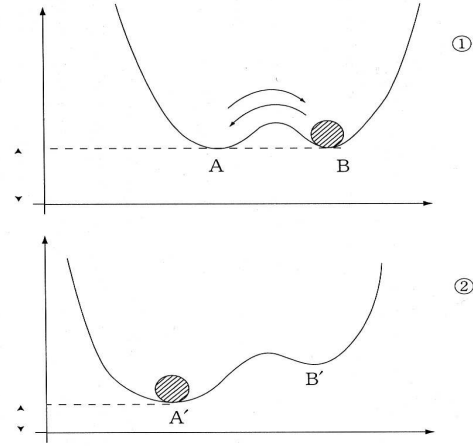
ースはわれわれもよく経験します。

本音とたてまえということを考えてみると、これはほとんど常に分離していると言っているでしょう。本音をとれば自分自身は身体や気分は楽だが、理性的に對外的なことを考えるとたてまえが必要だということになります。神経科に受診される方のかかえている問題は、こ

ないわけでは、しかしB点は真の安定点ではないので、何らかの意味で問題があり居心地がよくない。つまり苦しくて症状が出てくるということになります。

しかし、広く見渡せる視野を持つことにとつては、B点ではなくA点が、いちは安定できるということがわかるというわけです。このようなほんとうの安定点に移るための一つの方法が認知療法であるといえるでしょう。二つのプロセス、つまり視野を広げることと、二つの安定点（一つはほんとうのもの、もう一つは偽の安定点）の間にある障壁を越すということがあると思います。認知療法をやっている常に出くわす、患者さんのなかのある種の抵抗感はこの二つのプロセスで必要なエネルギーということになるでしょう。

図表 2



いまじぎの若者は

十二月二十五日アフリカ、ケープタウンを船は出港しました。いよいよインド洋から大西洋です。太平洋は私たち日本人にとって馴染みが深いですが、ここ大西洋はめつたに船で渡るといふことはないでしょう。まあ、同じく海だからそう変わりませんが。二十四日のクリスマスイブには船のメインレストランでディナーが出ました。普段は定食ですが何か記念の日になると軽いコース料理が出ます。案内には軽い正装をしてお越しくださいとあったので用意したスーツを着てテールブルつきました。周りを見ると確かにフオーマルスーツやイブニングドレスの方もいますが普段着の人がほとんど。読者の皆さんの中には、世界一周クルーズだから毎夜、正装で豪華食事、パーティーだろうなど想像されている方がおられるかもしれませんが、この船に限っては全然違います。前にもお話ししたように朝はパンとミルクなどの軽食、昼はラーメン、井などのバイキング、夜は定食で簡素なものです。まあ、船の中では運動量も知られているのでこれで十分です。しかし若者達はまだ足りないのかメインレストランで食事をしてまた上のサブレストランで井や麺類を食べています。基本的に食事は一人一箇所でお終いですが、何度食べてもわからないのでそういう人もいま

す。これも前に話しましたが、料理長が日本人に変わってから格段に美味しくなつたらしいのです。前はどんなだったのか。さてここで久しぶりに船内生活での出来事をレポートしましょう。船内での日課は相変わらず忙しく、英会話、ダンス、ヨガ、レクチャーと休む暇もありません。友人も段々と増えてきました。まず最初に知り合ったのは私より年上の神奈川から来られている方、リピーターであったのでいろいろなことを教わりました。その方はボランティアで船内新聞の記者を前回に続きやるということになり、その方曰く、今回の船は少しおかしい。ヘエ、何処か以前と違うところがあるのですか。というような所から親密になりました。実を言うと、これも前にも話したように、この船に乗るということを事前に何人かの人に話したら、やめときあの船は危ない、左の船やで、という方が幾人かいました。左といつても舵を左方向にきくということではなく、まあ政治的に左翼ということでしょうか。このクルーズをはじめて企画したのがまだ学生であった現在政治家の某氏だからでしょう。私自身は政治的にリベラルと思つていますが最近の安部ちゃん体制のおかげで、全体が右へ振れているのでリベラルは左と言われるらしいので表現に苦労しますが、ということとで私自身、皆が左といっているがどのように左なのか大変興味がありました。大々的に洗脳教育をして日本に帰つてきたら全員、危険思想家になつていくのか。

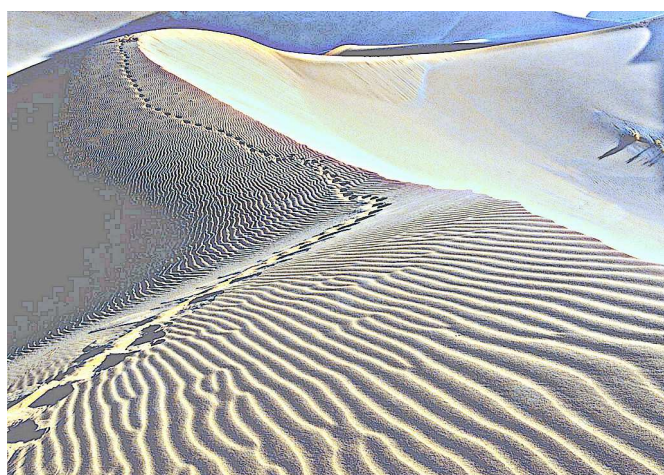
よし、私の意見で戦つてみせるぞ、興味津々です。しかし何時になつても思想教育が始まりません。相変わらずダンスと娯楽映画、講演会は旅行案内と天文観察。十二月八日は太平洋戦争開始の日さあ、なにかあるぞとおもつていましたが、三日にフルーツパーティー、四日にはなんと洋上運動会。なんだ、この船は。さらに講演会の後の質問コーナーで私が少し政治的な質問をすると、司会者から信じられない言葉が。「意見」は受け付けません、講演者が話された内容での疑問点に限つて下さいと。全然噂と違うじゃない。せっかくの闘志が早くもそがされてがっかりです。なんでこうなつたの、かの新聞記者に聞いたかったです。すると意外な答えが返つてきました。あの海賊事件かららしいです。ソマリア沖での海賊体制はこの前にも話しましたね。その後のオマケの話があります。海賊に追いかかれ、すつてんのところで無事逃げ延びた船は再び危機に見舞われました。エンジンストップです。いわゆるエンスト。大型船がそんなことあるのか。当時の船は相当古かつたらしく、稼働率を上げるため日本でドックに入るのもケチり何と航海中の応急修理でごまかしていたらしいのです。それでどうとうエンジンが壊れたというわけです。皆さん想像できますか、赤道近い海のうえで、十分な食料も冷房も無しで、海を漂う生活を。当時の写真を見せてもらいましたが、夜になると全員がデツツキに布団を敷いて寝ていました。冷房なしの船室ではどうして眠

ることは出来ません。今回の船に同乗していた体験者は食べるものも毎日同じで、牛乳や魚などはすぐになくなってしまっただと言っていました。そこで乗客は主催者に相当な交渉というか抗議をしたようです。いまでもそうですが、そもそもこの船は学生の理想のアイデアで生まれたためアマチュア的な部分が多く残っています。ボランティアを半強制的に求めるとか、責任を曖昧にするところです。

料金が安いということを手とり少々の事は我慢しろというお役所的な姿勢です。これがこの時に如実に表れたらしいのです。十分な説明をせずに乗客の意見を無視していたらしいのです。その結果帰国してから裁判になり今現在も継続中です。だから、この船の主催者は現在もややこしいことには一切介入せず、関わらないという態度で一貫しています。さて、批判ばかりで何か年寄りのぼやきコーナーみたいになってきていますが、いいですので大目にみてください。最近の若者についてです。「最近の若者は」この言葉がある講演会後の関連で質問で使ったら、会場を出るときにある年配の女性に呼び止められ注意されました。最近の若者という言葉は不適當で失礼だ、一括りで言いなさんなどということらしい。その言葉を聞いて私は即座に言い返しました。あんたのような偽善者が若者をダメにしている。反論があるなら若者から直接あるべきだろう。あんたはいつかから若者の代表者になったのかと。頭にきていたので少しひどいことを言ってしまった

たが、私自身も言いたくないがこの船の若者に限っていえばひどいレベルである。まず、モラルの欠如。この船は予想に反して若者、三〇歳以下は一割も乗っていない。しかしその船内のモラルは都会にたむろする若者と少しも変わらない。普通に考えれば、世界一周の船に若くして乗るのだからなにか希望や、大志、夢をもっているのだらうと思う。しかし、歴史的、時事的な講演でも若者からの質問は皆無。そもそもそのようなレクチャーを聞きに来ない。なにに熱心かという、夜な夜なのカラオケとパーティ。一昔前ならおっさん、おばさんの領分。そして運動会。応援団では仲間同士で踊り狂う。ここでまた一言ぼやきたい。私は地域の自治会で役員をしている。毎年、区域の運動会があるが若者は率先して運営に参加しない。当日すら出てこない。ではなぜこの船の運動会にはこんなに熱心なのか。これが聞いて見てはじめてわかった。そもそもこのクルーズに参加する若者はお金がない。そこでこのクルーズを主催するグループでアルバイトをするという。ポスター貼りやら企画運営準備である。この労働が旅行費用に充当されるらしい。そうすると船に乗る前から長期の付き合いで若者仲間同士として固まっています。そういう若者たちが船に乗ってくるのだ。だから同類だけで群れる。「最近の若者」を象徴している。異世代とのコミュニケーションに対して極端に不慣れである。これが日本国内だけの現象であれば特になにもないが。一歩

日本を出てこのような実態をさらしてしまふと異国間の文化問題になる恐れもある。私はここまでで何度かに日本人として恥ずかしい思いをしてきた。まず、どの国へいっても日本の若者は固まると奇声をあげて話す。まるで幼稚園の遠足のようだ。レストランでもどこでも。何事が起こったのかと現地の人々が振り返る場面が多かった。またクリスマスパーティーの翌日、丁度南アフリカ、ケープタウンの喜望峰を見下ろす展望台にある危険表示の冊を乗り越えサンタクロースの衣装をした日本の若者たちが騒いでいた。現地の人は驚きの様子で見ている。断崖絶壁である。また、サンタクロースというある意味では宗教的なものを象徴するような衣装で禁止されている行為をする。これは、ひとつ間違えば、侮辱罪になる場合もあるであろう。日本の若者も単独ではこのようなことは決してしないとと思う。いつからこんな幼稚な集団心理に支配されるようになったのか。私たち親世代の責任かもしれない。陰湿なイジメやヘイトスピーチ。異質者を排斥して同類同士で固まろうとする排外閉塞思想はこのところの政治的傾向の反映でしょうか。とてもこのよう状態で国際社会には通用しません。世界を見てやろうとする前に自分たち自身を見ろということもっと関心をはらうべきであるという感想を持ちました。さて、二十八日はアフリカ最後の寄港地ナミビアです。その国のウォルベスイと言う港に着岸しました。少しマイナーですが砂漠の国ですね。国の三



分の二が砂漠、日本の二・二倍の面積に二二〇万人が住んでいます。アフリカでは珍しくドイツの植民地で一八八四年に西南アフリカとなりました。しかし現在は独立していますが、旧来から南アフリカを植民支配していたイギリス系の力が強く白人間ではドイツ系の人々は差別されているらしく町で日本人と名乗ると、日本人は戦争に負けても誇りをもっていてうらやましいといった話を話していました。少し複雑な気分でした。さてドイツ風の街からバスで小一時間ほど走ると、そこは広大な砂漠。「ナミブ砂漠」は内陸ではなく大西洋の海沿いに南北約一三〇〇キロにわたって広がります。アフリコット色、赤橙色の砂丘が連なる姿は世界一美しい砂漠とされます。約八〇〇〇万年前に生まれた世界で最も古い

大人の今昔物語(6)

石川 吾郎

今回は歴史的人物の衝撃的なスキヤンダルの説話です。これはもう「教科書に出ない度」は最高の五ノ五です。

染殿の後、鬼のために乱れる話(今昔物語・巻二〇ノ七)

今は昔、染殿の后と申されるのは、文徳天皇のお母上(実は后)であった。藤原良房大政大臣と申された閑白の娘御(むすめご)であった。その容姿の美しさはぬきんでていた。ところがこの后、いつも物の気(け)に悩まされておられたので、種々のご祈禱をさせておられた。その中でも世間に知られた靈験あらたかな僧たちを召し集め、修験者の修法を行わせたが、少しもご利益はなかった。ところで、大和の葛木山に金剛山というところがあるが、その山に一人の尊い聖人(しょうにん)が住んでいた。平生ここで修行を重ね、鉢を飛ばす行により日々の食事を得、瓶を遣って水をくんだ。こうして修行を重ねたので、その靈験は並びないものになった。しだいにその名声が高まり、そのうわさは天皇と父の大臣の耳に届くまでになった。天皇は「あの聖人を召し出して、後の病を祈禱させよう」とお考えになり、召し出すよう命令された。勅使がこの聖人のもとに使われ、この事情を説明するが、聖人はは

じめ幾度も辞退申し上げた。しかし天皇の命に背くことはできず、とうとう承知して参内したのであった。

*

*

後の御前にまかり出て、聖人は祈禱をしてさしあげる。するとその効果は著しく、後の侍女の一人がたちまち正気を失い興奮してなきわめきだした。侍女は神憑りとなりあたりを走り叫びまわった。

聖人がさらに祈禱を続けると、この侍女は呪縛され祈禱で責められる間に、懐中から一匹の老狐が飛び出した。転がり倒れ伏し、走り逃げることはかなわない。聖人はこの狐を捕らえさせ縄に繋いで、二度と人に憑かぬよう教化した。父の大臣はこれを見て、たいそうな喜びようであった。そして後の病は二三日ほどで快癒した。

大臣は喜んで、聖人にしばらく逗留するように勧めると、聖人はこれに従ってしばらく滞在した。季節は夏のころとて、后は単衣のみのお姿でおられた。そこへ風が几帳(きちょう)の垂れ絹をさっと吹き、まくれ上がった隙間からほのかに後の姿が見えた。かつて見たこともない美しい姿を目にして、聖人はたちまち心を奪われ、后に対し深い愛欲の念にとらわれたのだった。

しかしなすべき方途もなく、聖人は心中悶々としていた。胸は焼き焦がされ、一ときも心から忘れることができず、分別を失って、人目を避け几帳のなかに忍

び込んだ。聖人はついに後の寝ておられる腰に抱きついた。后は驚きあわて、汗みずくになって怖がったが、女の力では抵抗しようがない。後の力つきたところで、聖人は力に任せて、后を犯したのだった。

*

*

これを見た女房たちが騒ぎたてた。ここに侍医の当麻の鴨継(かもつぐ)という者がいた。彼は天皇の命を受け、後の病を治療するために参内していたのが、殿上の方がにわか騒がしく叫び声が聞こえてきたので、驚いて走って参上すると、几帳の内からこの聖人が出てきた。鴨継、聖人を捕まえ、天皇にこの経緯を申しあげた。天皇はたいそうお怒りになり、聖人を捉えさせ、投獄させられた。

この聖人は、投獄されたとはいえ、まったく弁明せず、天を仰いで泣きながら自ら誓って言った。「我ただちに死んで鬼となり、この後の生きておられる間、念願のごとくに后と睦みあうのだ」と。獄司がこれを聞き、父の大臣に報告した。大臣これを聞いて驚き、天皇に奏上した。天皇は聖人を許し、元の金剛山へ返すことにした。

そんなわけで聖人は元の金剛山に帰ったが、后を恋いこがれる思いは耐えがたく、后といっしょにいたいと強く願い、従来より帰依していた三宝に、懸命に祈ったが、この世では願いは実現できない。聖人「本願どおりに、死んで鬼になろう」



砂漠とも言われています。映画「猿の惑星」をはじめ数々の映画がここで撮影されています。砂だらけの地。鳥取砂丘より大きいのは確かです。限りなく砂が続きます。でも私たちは当然バスで移動しているのが暑いとか喉が乾くだとか暑気楼を見るほどふらふらになることはありません。こんなところに一人取り残されれば別ですが、やはりそこは観光、どの地も行けば同じです。街にもどり博物館で見学して外へ出ると、いわゆる現地人の人たちがそれ風の衣装で土産物売っていました。ヒンバ族(の特に女性)は、乾燥と強い太陽から肌を守るために、赤い石の粉と動物油脂を混ぜたものを髪や皮膚に塗っているのが印象的です。しかし現在こんな格好で日常生活をしている人はいません。日本人がちよんまげ、刀で歩いていないのと同じです。その上、本来、上半身は裸のはずですが、道徳上の理由からシャツを着なければならぬそうです。なんとも中途半端な文化紹介です。彼らもそこは割り切り、写真ワンピースは一ドルでした。さてこの地でアフリカともさよなら。すでにインド洋から大西洋にきていますが今度は南米大陸を目指しこの海洋を横断します。まだ鯨は見えていませんがいざれ見られでしょう。大西洋で迎えるお正月もどのようなものでしょうか。

と思つて、断食をして、何も口にしなければ、十日あまりで飢え死にした。その後、たちまちに鬼となつた。その姿は、身は裸で、頭はざんばら髪。身の丈は八尺（二米二十四糎）ばかり、膚（はだ）の黒いことは漆を塗つたよう。目には金の椀を入れたようで、口は広く開いて、剣のようなすごい歯が生えている。また上下に牙がのぞいている。赤い鞭を搔いて、腰には小槌を差している。

* * *

この鬼が突然、后のおられる几帳のそばに立つた。人々はこの姿をはつきりと目撃し、皆驚き惑い、その場に倒れ伏す者、逃げ出す者もある。女房などもこれを見て、ある者は失神し、ある者は衣を引き被つてふせつてしまう。お側に入入りできない者は、目撃していない。

そういうする間にこの鬼の靈魂、后の正気を奪い狂わせてしまったので、后はすまし顔で身づくろいをし、微笑んで扇で顔をおおい、几帳の内に入れ鬼と二人で共寝をされた。

近くの女房たちには、日頃ただ恋しく侘しかったことなどを鬼が語るのが聞こえてくる。后もうれしそくに笑つておられる。女房などは皆逃げ出してしまつている。時が経ち、日が暮れるころになると、鬼は几帳から出て行つたので、「后はどうされているだろう」と女房たちが急いで参上するが、后のご様子は普段とお変わりにならず、「そんな事があつたか」

とも考えられる気配もなく、ケロッとしておられる。すこしだけその目付に、ふつと普通でない様子をお見せになる。

この経緯を天皇にご報告申しあげると、驚き恐れられるというより、むしろ「后はこれからどうなつてしまふのだろうか」と、たいそう嘆かれる。その後この鬼は毎日同じように現れるようになったが、后は怖がるということもなく、正気をなくし、ただただこの鬼をいとおしい者として対応していた。これを見て宮中の人々はみな后を哀れと思ひ、嘆きあつていた。

そういうする間に、この鬼は、人に託して言うに「我必ず、あの憎つき鴨継の怨念を晴らしてやる」と。鴨継はこれを知り、心中恐怖におののいていたが、その後どれほど経たないうちに突然死んでしまった。また、鴨継の息子は三四人いたが、みな気がふれて死んでしまった。

こんな経緯で天皇と父の大臣はこれを見てたいそう恐れられ、諸処の高貴な僧たちを集めて、この鬼を祈祷で鎮めようと入念に祈らせた。さまざまな祈祷が効果があつたのか、この鬼三月ばかり現れなかつたので、后のお心もすこし正気にもどり元のようになられた。天皇はこれをお聞きになつて「今一度、后にお会いしてみよう」と、后の住居の宮に行幸された。これは普段の行幸より特に感慨深いものとなつた。さまざまな官位のもの

も欠けることなく、つき従つた。

* * *

天皇は后の宮にお入りになり、后にお会いになり泣きながらしみじみしたことなどをお話しになるので、后も感慨深く感じられた。外見も以前と変わらぬお姿であつた。

そうしていると突然、例の鬼が部屋の隅から躍り出て、后の几帳の内に入った。天皇はこれを「あさましい」とご覧になつている間に、后は様子为例のようにさつと変わり、几帳の内へ急いでお入りになる。

しばらくして、この鬼は南の正面に躍り出た。大臣や公卿からさまざま官位の者がまともにこの鬼の姿を見て恐れおののき、「あさましい」と思う間に、后が鬼に続いて出てこられた。衆人の見る前で、鬼と共寝をして口に出して言えない見苦しいことを、はばかりこともさらになく、いたし始めた。やがて鬼が起き出し、続いて后も起きて奥にお入りになつた。天皇は一部始終をご覧になり、なすすべもなくお嘆きになりながらお帰りになつた。

そんなわけで、高貴なご婦人はこの話を聞いたならば、このような僧を身近かに近づけてはならない。この事件はきわめて不都合で、はばかりがある事とはいへ、未来の世の人々に知らせ、法師にみだらに近づぐことを強く戒める目的で、このように語り伝えているということだ。

《コメント》

今昔物語一二を争う不思議な物語。ここに登場するのは、容貌からしてまさに鬼なのですが、原文の表題では実は「天狗」と表記してあります。当時は鬼と天狗のイメージは重なつていたようです。また悟りを開いた修験者は鉢を自由に飛ばすのが定番だつたようです。

精神的に惑乱したといえファーストレディーのスキヤンダルを題材にした説話。このような話がよく記録されたものと驚きます。そういえば「源氏物語」も天皇の後のスキヤンダルを扱つた小説に他なりません。この話しが教科書に出ることはまずないことでしょう。



現代社会は誰がつくったのか

哲学屋のつづきやきというタイトルでこのコーナーを書き始めましたが、私のように哲学はよく知っているが世間のことはよくわからない、それに反して読者の方々は世間のことはよく承知だが哲学というものはよくわからない、また興味もない。こんな水と油のような状態に果たしてどのような接点があるのか暫し悩んでいる今日この頃であります。しかし、悩んでいてもしょうがないので前に進みましょう。

前回までの話をもう少しわかりやすくまとめてみましょう。哲学が解明しようとしているものは私たちが日常当たり前だと思っている事柄です。それが「なぜ」そうになっているのと疑います。ようやく言葉を覚えた子供が「なぜ、なぜ」と繰り返すことと同じです。

子供はこのような時期に大人達から「理由がよくわからないが、そういうものだ」という説明を繰り返されるうちにだんだんと質問するのを諦め、疑問も忘れ去ります。しかし私たち哲学屋という特殊な人間はずっとこの疑問を持ち続けている、いわば永遠の子供のようなものです。

一方、自然科学はもともと哲学から分岐したのですが物事の成り立ちを「ど

のように」と問います。哲学は理由を、科学は方法を解明するのです。人間はもともと『知ることを欲する動物』であるというアリストテレスの言葉も紹介しましたが、そういう思考傾向が進化の過程で生まれたのでしょうか。そのような歴史から人間はある時、言葉を獲得し記憶というものが可能になり、それから推測したり想像したりすることもできるようになりました。

さらに身近な他の人のみならず、時間も越えて知識を伝える、残せるということも出来るようになりました。その過程で宗教、科学が生まれ、ここから文明が生まれました。

私たちが今ここに当たり前に生活している環境、国家であれ、制度であれ社会慣習であれ、私たち自身の考え方でさえ、すべて何らかの理由なしに在るものはありません。ということは今の状態というのは自明で固定的ではないということです。

そういう哲学的発想のなかから現代社会がグローバルズムという西欧化が進んでいる。これは第二次の世界の近代化ではないかという話もしました。近代化とは西欧化のことという話もすでにしました。第一次の世界近代化は十八世紀以来の産業革命から、いっきに全世界に拡大しました。そのベースはそれ以前から整っていました。二世紀のキリスト教十字軍による異文化への侵略とその延長で

ある十五世紀からの大航海時代からの植民地化による帝国主義。つまり宗教と経済が結びついて世界征服が可能になったのです。

人間の欲望には「知りたい」という前に「食べたい」というがあるのです。このような要因で生まれたのが私たちの現在の思考方法、考え方です。以前は自然と精神は一体だと考えられて、自然を解明し改変するには一定のブレーキがかかっていたのですが、デカルト思考により、後はこのブレーキは外されました。これにより自然は単なる物資として精神である思考の対象とされました。これが二元論ですね。さらに現代はインターネットにより情報までもが物として扱われ、暴力を背景にした国家によるグローバルズムという半強制的契約により新たな植民地化がすすむ第二次近代化と呼べるような状況になっています。おっと、世間という哲学屋がうっかり現代社会を批評するという門外漢の行為に走りそうになりました。

哲学の話に戻しましょう。このデカルトにより物質と精神は二つ分けられたのですが、当時の哲学者も全員これに賛成したわけではありません。

そもそも、デカルトは精神と物質を分けて、考えている自分、その精神こそが唯一確実なものだ、そこから全てを出発しようとしたのです。つまり自分の頭で考え納得したものだけを基礎にしてそこ

から他のものを類推したり解明しようとはしました。デカルトはご存知のように十七世紀前半のフランス人です。いまでもそうなのですがどうもフランス人というのは自分の主張にこだわる人が多く頑固です。悪く言えば自分中心主義ですね。

これはかのデカルトから出発しているのかもしれませんが。これは哲学史では大陸合理論と呼ばれています。つまり全てを自分の思考によって解明しようという思想です。難しいことばで言うところ「演繹法」です。つまり自明な定理から出発して個々の問題の正解を見つけてというやり方です。これはまあ、平たく言うと学校方式ですな。先生が問題の解き方つまり公式を教え、生徒はそれに従って答えを出します。これに対して十七世紀の中頃、イギリスでジョン・ロックは経験こそが唯一確実なものだといいました。ロックと言ってもロックンローラーではありません。イギリスのビートルズはロックミュージックの王者ですが、哲学用語で、こちらは大陸合理論にたいしてイギリス経験論と呼ばれています。

そもそもイングランドを中心とした大陸から離れた国々は独特の文化を持ちがちです。東アジアでは日本も同じですね。それは大陸で生まれる文明や文化の源から遠く離れているという「辺境」と言葉でしばしば語られます。それらは様々なバリエーションがミックスされ良く言えば洗練化されて蓄積されます。ゲルマン

民族の大移動というのは学校でも教わりました。五世紀頃のヨーロッパ大陸で東のフン族、どうもあの秦や漢を脅かした匈奴という説もありますが、ゲルマン民族を中心とした各部落が住んでいた土地に侵入してきたという民族移動です。そのゲルマン民族の中の比較的北に住んでいたのがアングロ人とサクソン人です。彼らは今のイングランド中心とする島に上陸し、今まで住んでいたケルト人に変わり王国を作りました。これが現在のイギリス連邦国ですね。つい最近、独立騒ぎで有名になったスコットランドなどこの民族大移動以来の部族問題なのでしょう。さて歴史の勉強にはこれくらいにして。哲学に戻りましょう。

大陸から離れた辺境の地、イギリスでは大陸とは異なる思考方法を持つようになっていました。それは、経験というものが唯一の真実である、というものです。他の人がいうことは自分がやってみなければ信用できないという体験型思考方法ですね。ロックは、人間は生まれながらには白紙だといいました。デカルトは方法的懷疑で世界のもの全ては疑わしいとしてもそう考えている自分は疑いようがないとして最終的には自分の生まれもっている考える能力を唯一の真実としました。これを『生得観念』と言いますが、ロックはこれを否定して、生まれながらに持っているものなんていうのは無い、すべては生まれてからの経験、それぞれ

の人の体験から習得するものだと言い出しました。ロックがいた時代十七世紀中頃、イギリスではピューリタン革命や名誉革命などで市民の意識が王政や教会など絶対的なものに対して疑問を持つという背景もあり、そして議会などをつくり実際に社会を動かしていたという市民階級の発生の背景があるようです。また、それより以前にもイギリスでは「知は力なり」といった十五世紀半ばのフランシス・ベーコンのように実験を重視する傾向がありました。なんでもやってみなければわからないということでしょう。仮説をたてて実験をして、それが仮説どうりになれば仮説は正しいとするやり方です。これはデカルトの合理論、「演繹法」と全く反対ですね。これは「帰納法」と呼ばれています。実験を繰り返して真実に近づくやり方です。今日の科学はすべてこの実証主義的な方法的をその理論の根拠としています。先程から話をしてきているこのイギリス経験論の伝統は、今日世界の趨勢であるグローバリズムに脈々と受け継がれているように思います。つまり、理想よりも既成事実が優先される現象です。現在の歴史を大きな視点で見ると、アングロ・サクソン系、つまりイギリス経験論亜流のような経済や軍事力の力による既成事実を積み上げて世界を形成している潮流にたいして、EU（欧州共同体）のような理想主義的な大陸合

理論が対抗してきているという古くて新しい問題が今も展開されていて、世界はどちらに向かうのかという個人的な興味もあります。さて、今月は最後に皆さんに宿題を出しましょう。来月までに考えておいて下さい。デカルト対ロック、合理論対経験論の問題です。『生まれつきの盲人が今は成人して、同じ金属のほぼ同じ大きさの立方体と球体を触覚で区別することを教わり、それぞれに触れるとき、どちらが立方体で、どちらが球体かを告げるようになったとしよう。それから、テーブルの上に立方体と球体を置いて、盲人が見えるようになったとしよう。問い。盲人は見える今、触れる前に視覚で区別でき、どちらが球体で、どちらが立方体かを言えるか。』これは三百年以上前にロックに宛てたある読者からの質問の手紙です。これ以後、時代を経て沢山の人たちによって議論されたテーマです。現在でも議論されています。さて皆さんも挑戦してください。

記録と表現の間

大江雉鬼

手許に一冊の古いアルバムがある。写真はどれもセピア色に褪せていて年代物であることがわかる。その中の一枚、岩頭に佇む少年とその足下に置かれた縞りザイル。そして写真の傍ら、黒色の台紙に白い文字がこう記す。

ザイルからげて穂高の山々

明日は男の

明日は男の

どきよ試し……

一夜穂高のわさびとなりて

京の小町を

京の小町を

泣かせたい……

流麗な文字には風情さえ漂うが、この一枚を見て写真とは何なんだろうと考えてみた。原理的な意味で語るなら、真の姿を写し取ったもの”と分解される字面が本質を言い当てている。自然光が描いた像、すなわち人間が肉眼で普通に捉えることのできるものを、紙などの上へ正確に記録したものである。この段階でのポイントが「自然光によって描かれた像」ということと「正確に記録」ということの二点である。だが前者は、赤外線カメラや高感度カメラを考えれば



赤外線カメラや高感度カメラを考えれば

うなると、そもそのところ記録とはなんだろうというところから始めねばならない。

記録の意味（どこかで独断的な定義が必要になるのなら、ここがそのタイミングだろう）、それは時間に対する逆逆である。人間に限らず、すべての生物は時間の流れの中で老いていき、いずれは消滅する。スパンを長くすると有機物だけでなく、無機物も含めて存在するものすべては時間の支配から逃れられない。しかし時間の横暴を唯々諾々と受け入れるのではなく、微々たるものであったとしても抗いの欠片を示す可能性があるのならそれは記録という行為に現れる。絵画による記録しかり、文字による記録しかり、時間の支配に甘んじているのなら、秒単位の刹那で消え去ってしまうものをその何倍、何十倍の間にわたって留め置くのであれば、まさに時間への反逆といつていい。

分かるように、装置の性能に大きく左右される。また後者の正確さもトリミングによって錯覚を誘ったり、合成や補正でいくらか揺るがすことができる。しかしそれらに対して「記録」という点は強固な属性といえるのではないだろうか。写真とは何かと問われると、少し考えるだけでいろいろな定義が思いつき、確からしく思える定義でも環境次第ですぐに動揺を来すなか、記録のための手段であるという点は揺るがしがたいのである。そうした方向から検討すると、アルタミラの洞窟壁画以来の営みに属するパリエーションという極論に行き着くが、そ



は難しい。

そうしたことを前提にすれば、ひとつ興味深い現象が見えてくる。それは写真が記録しているものと、写真を見ている第三者である私との間の距離の問題である。記録は本質的にはメッセージ、つまり情報である。だとすれば内容は正しく伝達されるに越したことはない。すべてのメッセージに正確さが伴うわけではないのは勿論だが、写真による記録は情報の正確さが担保されているかのように思われている。しかし、先にも触れたように、写真の真実を揺るがす方法はいくらでもある。写真に文字情報でキャプションを添えることも、真実の補足だけでなく、メッセージを歪める方法にもなる。

では、この穂高の写真はどうだろう。傍らに添えられた「ザイルからげて……」を読むと「山男」という言葉が生きていた頃の心意気が彷彿とするのだが、それは写真が伝える情報ではない。むしろ写真と添え書きの合わせ技で生成された新たな表現である。記録された情報は正確に伝わるのが望ましいし、写真によるそれは正確さが強く期待される。しかし第三者への伝達になると、往々にして記録・情報・表現の不可解な絡み合いを体験することにもなる。

B級サラリーマン渡世譚 19 挨拶回り

明石幸次郎

Tさんの話を聞きながら、明石はノートを取ろうと構えていたが、業務引き継ぎらしき話ではなく、二人の上司であるA課長に対する日頃の不満を言い合う場となってしまった。明石は二人の話を黙って聞かざるを得なかったが、話の内容は、同じ課のこの二人より一歳年下のKさんが特別扱いされ、自由に海外、国内出張やら、交際費を使って好き勝手に、それを許しているK部長、A課長に対する対する不満、Kさんに対する妬みであった。明石は二人の気持ちに共感を示すそぶりをしながらも、二人が不満を言うほどの特別扱いを受けているKさんに興味が湧いてきた。上司が部下を信頼して自由にやらせ、それで部下が仕事の成果を上げているのであれば、営業のような、無から有を生むことを会社から、期待されている組織にとつては、成果を上げる部下の特徴を掴んだ上手いやり方ではないかと思ったりした。明石が居た工場では、自由にさせると言ってもそれは、決められた枠の中でのことであり、絶対にその枠からはみ出るような自由なやり方は、許されないことであった。2年間の工場の仕事では、製造部門という管理された枠内での仕事しか出来ない、息苦しさを感じ始めていたが、今回、輸出部

に転勤になりその初日に、この二人の話を聞いて仕事を自由にやらせて貰って、それを妬まれるようなKさんという先輩社員が同じ課にいることに、面白い部署に來たと感じていた。

Tさんが、明石が二人の話に入れない事を感じてか「明石君、転勤してきたばかりで、こう言う話を聞かされて、面白くないと思うかも知れんがなあ、段々と分かってくると思うけど、組織やから、A君には枳を嵌めて、B君には好き勝手にさせるような、課長のやり方はおかしいと思わへんか？極端すぎる部下の扱いは、課全体にとってはマイナスやと思わへんか？」はい。今日來たばかりで、まだ、よく分かりませんが、営業部門ですから、枳を嵌められたりするのには、私も嫌です。二年間でありましたが、工場では、相当な枳に嵌められて、窮屈でした」と答えない返事を返したら「あの工場はきついやろなあ。俺なんか転勤したら三日も勤まらんやろなあ」とMさんが言うとうとTさんが、

「俺も思い出すわ。貿易部門に居た時にニクソンショックで輸出が減り、工場へ転勤やと上司に言われたのが、切っ掛けで会社を辞めて、この会社に來たんや。七十三年途中入社や。入ってから一年目にバンコクへ行かされた。三年居て、日本に戻って來て二年目やなあ。まあ、海外に出たら、自由でのびのびやれるので、明石君も近い將來、子供がまだ小さい時

に海外に行ったら、エエよ。このMちゃんもマレーシアに四年程居たんやったんかなあ？」と話題がMさんになりかけたので「Tちゃん、本題に戻して、中国の市場はどうなんや？手間暇かけてやってるようだが、年一回の商談と後は、ちよろちよると、サンプル輸出見たいな引き合いが来るだけで、ここ数年はこんな状態で行き、その後は皆、国産化するのと違う？」Tさんは「俺は、まだ、日中国交回復して十年しかたっていないし、向こうは文革の後遺症がまだ残っている

ので、工業力、農業の機械化は、かなり遅れている。日本も中国に対しては、戦争をして、相当悪い事をしたのやから、民間レベル、企業レベルでも中国發展に協力するべきで、日本人としては当然の事やと思っている。中国との交流が仕事を通じて出來て商売はしんどいが、遣り甲斐はあると思っている。K部長は偉いで、今は儲かなくても良いので、会社の名前を売っておこう。種まきや、米作りと同じや。コツコツと継続していけば、十年経てば大きな市場になるわ。その種まきをするのがTさんの仕事やと言われた。この会社は戦前、北京と旧満州に工場を持っていて、結構、商売をやっていたと社史にも書いてある。Mちゃんと明石君に引き続くので、精々、種まきしてや。我々がやってる間は、収穫は期待できなと思うよ。十年は掛かるわ。明石君、君は中国に興味はあるか？中国の文

化、歴史などに興味がないと、この国と商売をやっているだけでは、面白くないで。まあ、これは、中国だけではなく、どこの国では言えることだけだなあ。Mちゃんは韓国が嫌いやったんや。嫌いな国は本当は担当しない方がエエのやけど。まあ、仕事やからそういう訳にはいかないが」

「中国は興味があります。学生時代は、文革が激しい頃でしたが、下放されて農村で働く日本の留学生が書いた本を読んで、感動して、母親に俺も中国に行きたいと言って、アホかと言われたことが今でも引つかかっています。その農村が今、どうなっているか興味があります」と答えたらTさんは「それ、西園寺さんたらというヤツが書いた本やろ。俺も読んだことがあるが、あれは、文革を一方的に礼賛した内容で、文革が終わったら、下放された時の労働の過酷さ、農村の旧弊など批判する本がどんどん出て、君の読んだ本なんかは、もう誰も読んでないわなあ。又、席を変えて、中国の話をしていかないといけないなあ。それで、引き継ぎやけど、此処に段ボール箱に関連書類がファイルして入っているのをおいおい見おいて、全部で四箱あるわ。一箱は整理して捨てたが」とテーブルの横に積まれた段ボールを見せられた。明石はそれを見て、その中身よりもここまで、情報、資料を蓄積してきた、途中入社のTさんにも興味湧いてきた。

原子力『破滅』未来のエネルギー

二〇一二年十二月、深夜のテレビ番組NNNDキュメント『遠きフクシマの故郷くさまよえる家族たち』を見ました。そのなかに、放送の二十五年前、小学校五年生の時に自分で作った標語『原子力明るい未来のエネルギー』を放射線防護服姿で訂正する大沼勇治さん(放送当時三十六歳)がいました。『明るい』の所に『破滅』と書いた紙を両手で掲げて、『原子力破滅未来のエネルギー』と。なお、☢は放射性物質や放射能を示す記号です。

標語は事故を起こした東京電力福島第一原子力発電所の地元、福島県双葉町の通りに掛けられています。東日本大震災と原発事故の直後に、ある民放のテレビ報道で商店街とおぼしき通りに掲げられたこの標語を見て、大変複雑な気持ちになったことを、ドキュメントを見ながら思い出しました。同時に、そう言えば、その後あの標語がテレビ画面に出ることはなく、不謹慎な言い方ではありますが、原発のあり方を考えるには象徴的な、絵になる風景なのになぜ出さないのだろうと不思議に思ったりしたことも思い出しました。

今回初めて知ったのは、この標語の裏

には『原子力正しい理解で豊かなくらし』というもう一つの標語が書かれていることです。正しく理解しなかったのは誰なのか。「天に唾する」言葉と言うべきか、原子力発電という未完成技術に対する、これ以上ない強烈な皮肉になっていきます。事故の後双葉町から家族離れ離れの避難生活を余儀なくされた大沼さんは、自分で作ったあの標語を、どうしても自ら訂正しなければならぬと決意したので。なお、この原稿を書いている時点での標語が今も双葉町にあるかどうか、私は知りません。あるとすれば避難地域などの関係で手をつけられないまま残っているのか、立場によればだれの目にも触れないようにしたい標語だろうと想像はするのですが。

『すべて世界史上の重大事件と大人物はいわば二度現われる、一度は悲劇として、二度目は茶番として、』、『こう書いたのはマルクスです（カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』、一八五二年）。しかし、もう一度原発事故が起これば、悲劇も茶番も超え国が崩壊する、後は野とも山ともならないでしょう。立つてるものは親でも使えばいい、しかし儲けのためにあるものは使えという再稼働頼みはよもだにもなりません。『地震津波噴火原発ここに置いとくよ』（一光）、恥を知れ！です。

原発のことを考えると心が揺れます。

揺れる心の自作の駄歌・駄句を並べてみました。

◇スリーマイル、チェルノブイリの

事故ありてフクシマありき被爆せし国

◇ありふれし水の怒りが汚染水

廃炉への道ぬかるみにして

◇ありふれた水の怒りです汚染水

凍結拒み海へひた寄す

◇零下八十度にて沸くべき水が

地にあふれいのち育む水の星・地球

◇満開の桜幾度（いくたび）廃炉まで

◇地震津波噴火来ず神頼み再稼働

◇自然から核の力を解き放ち

術（すべ）なき科学の端に我もいし

◇自然から核の力を解き放ち

術なき科学の愚を思いおり

◇満開の桜幾度数えたか

核のある夏フクシマの夏

◇自然から核解き放ち七十年

ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ

◇人も我も地水火風自然の子

自然の支配自然の恵み

話を戻します。学校の先生からかどう

かはわかりませんが、この町に原子力発電所ができることになった、原子力について

の標語を町が募集しているから君たちも何か考えたかどうか、ときっと大人

から言われたのでしょうか。大沼少年は、

純粋無垢に、『原子力明るい未来のエネルギー』と考えたのです。四半世紀後にまさか福島がフクシマになるとは夢にも思

わなかったでしょう。少年に罪はありません。大人が仕掛けた罠（際どい言い方をします。大人にも罪はないのかもしれない

ませんが少年よりは疑ってかかるべきでしょう）に少年はいとも簡単に落ちるの

です。大げさに言うと、少年が世の中のからくりが気付き何が起きているかを的確に理解するには、余程の努力と時間がかかり

ます。努力しても気付き理解することは一生できないかもしれません。テレビで

大沼さんの話を聞きながら、私はおよそ半世紀前、私が中学二年生だった

時の出来事を思い出していました。それは、一九六二年全国一斉に行われた学力

テストに係わります。そのとき私は何を思い、思わなかったか、次回に書きま

しよう。

（かたちは心であり、心はかたちになる
■大分の素老人）

編集後記

いよいよ今年も年の瀬を迎えて何かと気忙しくなってきました。

先日、友人たちと生駒山に登ってきました。初めての生駒山でしたが、山頂から大阪を見ながら、古代の渡来人たちの話を聞くと、昔のロマンがよみがえって来るようです。

朝鮮半島から船に乗り難波津に来て、生駒山の暗峠や南の竹内峠を越えて行き来した様子を想像すると古代史を勉強したくなりました。

下山後、高さんが勧める焼肉屋でご馳走になりました。その時の、焼肉が美味しかったのでご紹介します。小さなお店で、ご夫婦でされているのですが、たれにつけたホルモンが臭みもなく柔らかくて美味かったです。店の名前は、焼肉・朝鮮料理、味楽。大阪環状線の西九条市場前です。

来年もよろしく願います。

皆様、良いお年をお迎えください。

「ごきげんよう。」

